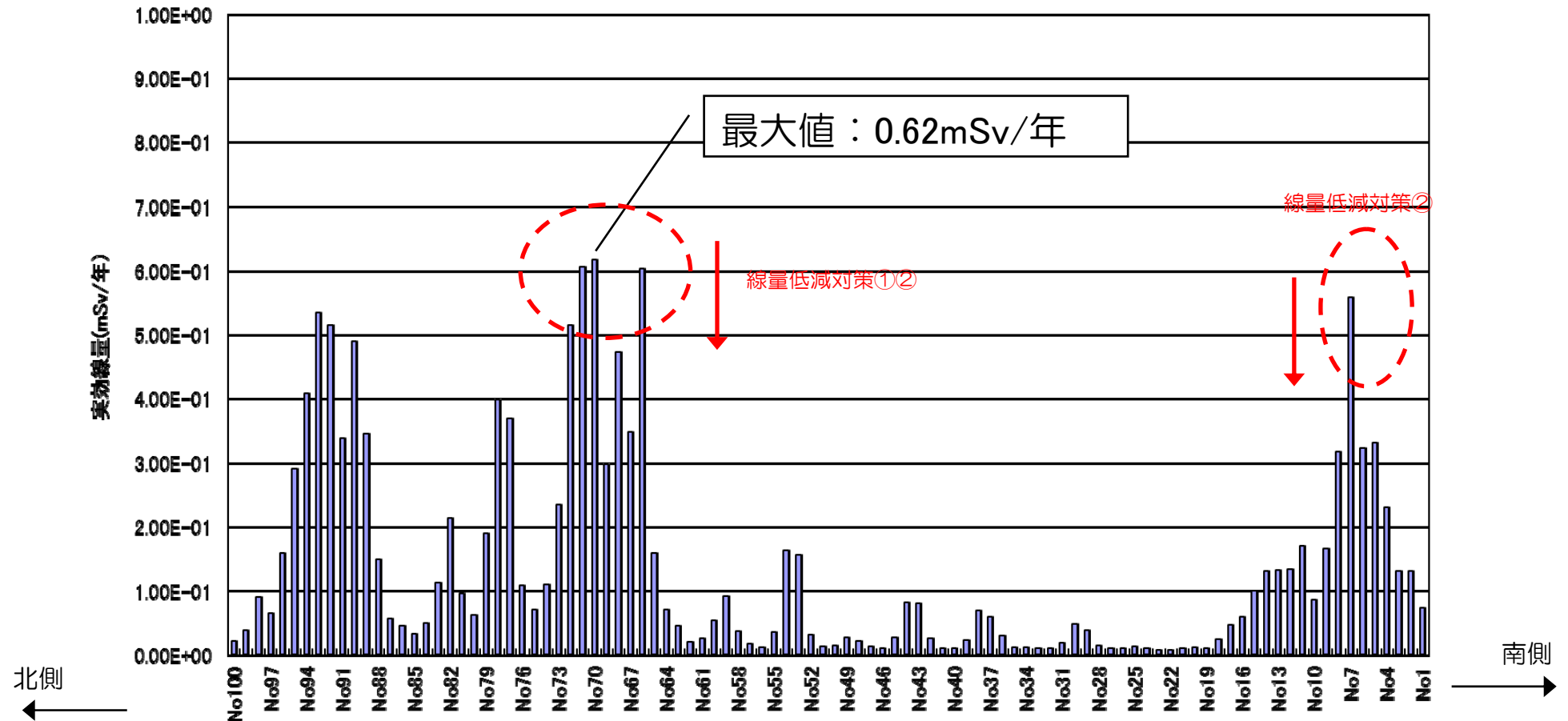


廃炉作業に伴い追加的に上昇する敷地境界実効線量 (評価値) の制限達成に向けた取り組みについて

2015年3月25日
東京電力株式会社

固体廃棄物及び設備

平成27年3月17日認可時の評価値



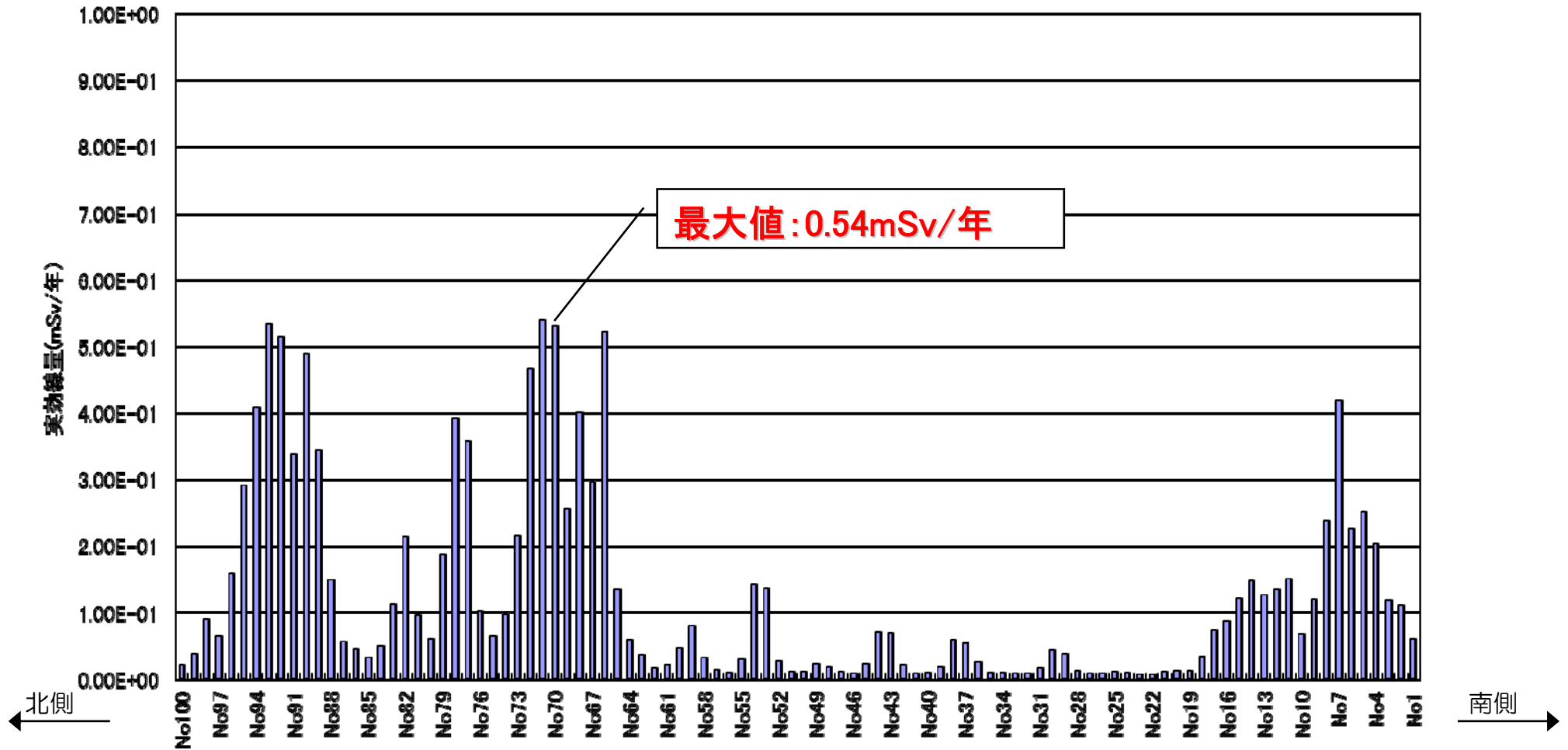
【線量低減対策】

①ドラム缶等仮設保管設備（ドラム缶、大型廃棄物）、一時保管エリアVの線源条件を見直し
→補正申請準備中。

②使用済セシウム吸着塔の線源条件を見直し
→変更認可申請中

固体廃棄物及び設備

平成27年3月末の評価値（見込み）



気体廃棄物

【連続性を考慮した放出量評価】

⇒現在，行っている放出量評価について連続性を考慮する。

気体廃棄物の放出量 = ①放射性物質濃度 × ②流量
⇒放出量から敷地境界における年間の実効線量を評価

	現状	今後
①放射性物質濃度	月1回の測定を用いた評価	連続データを用いた評価
②流量		

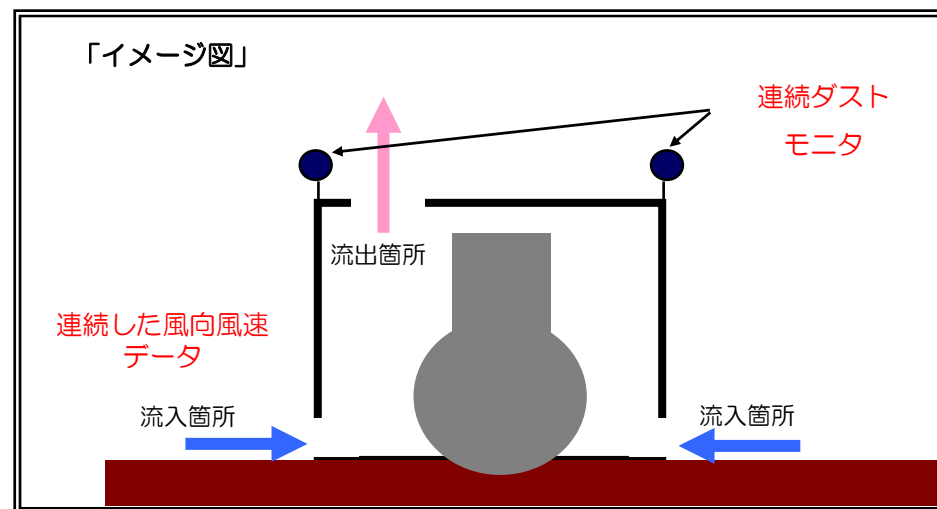
<今後の評価手法（案）>

①放射性物質濃度

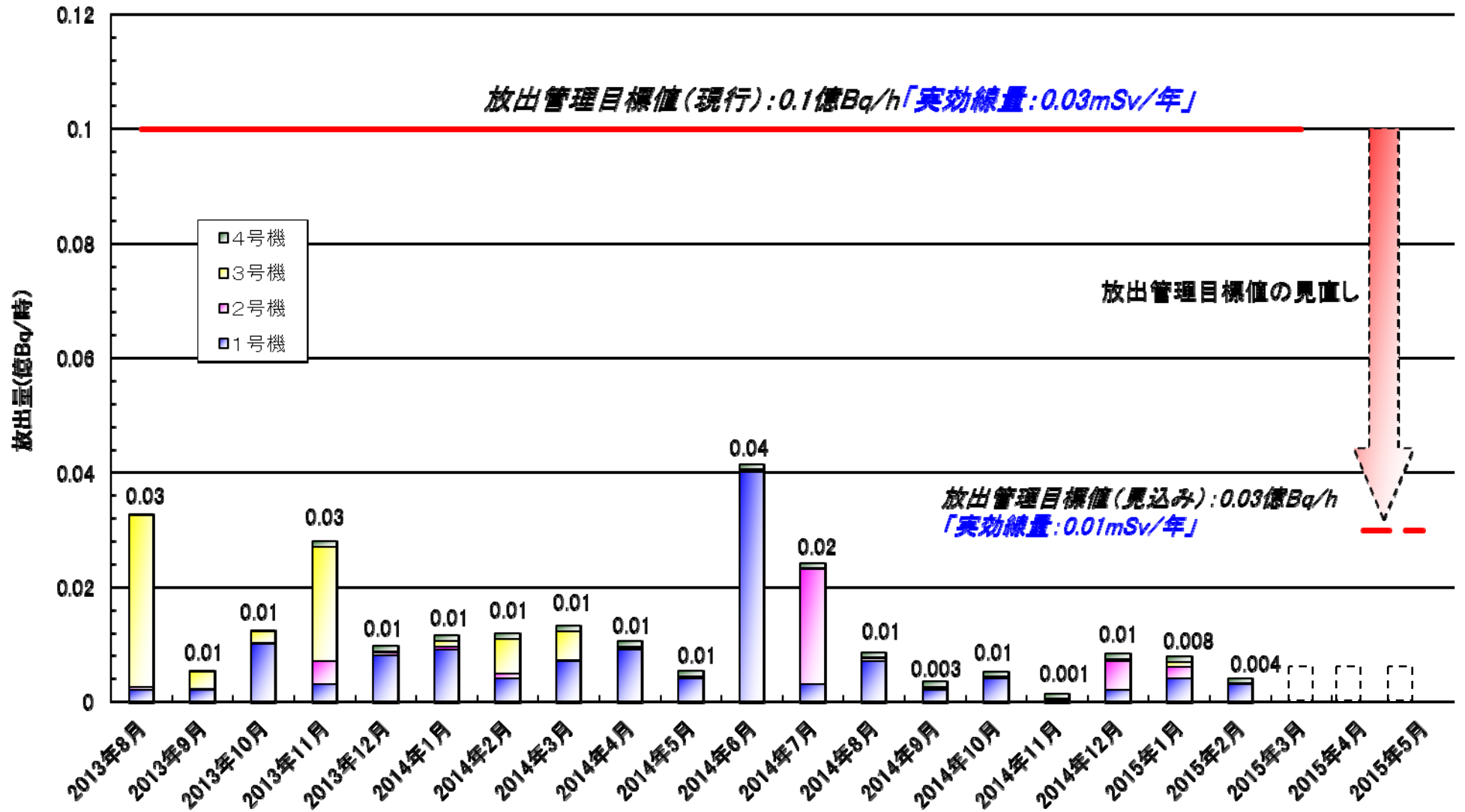
原子炉建屋上部における**連続ダストモニタ**の値を参考とする評価方法を検討。

②流量

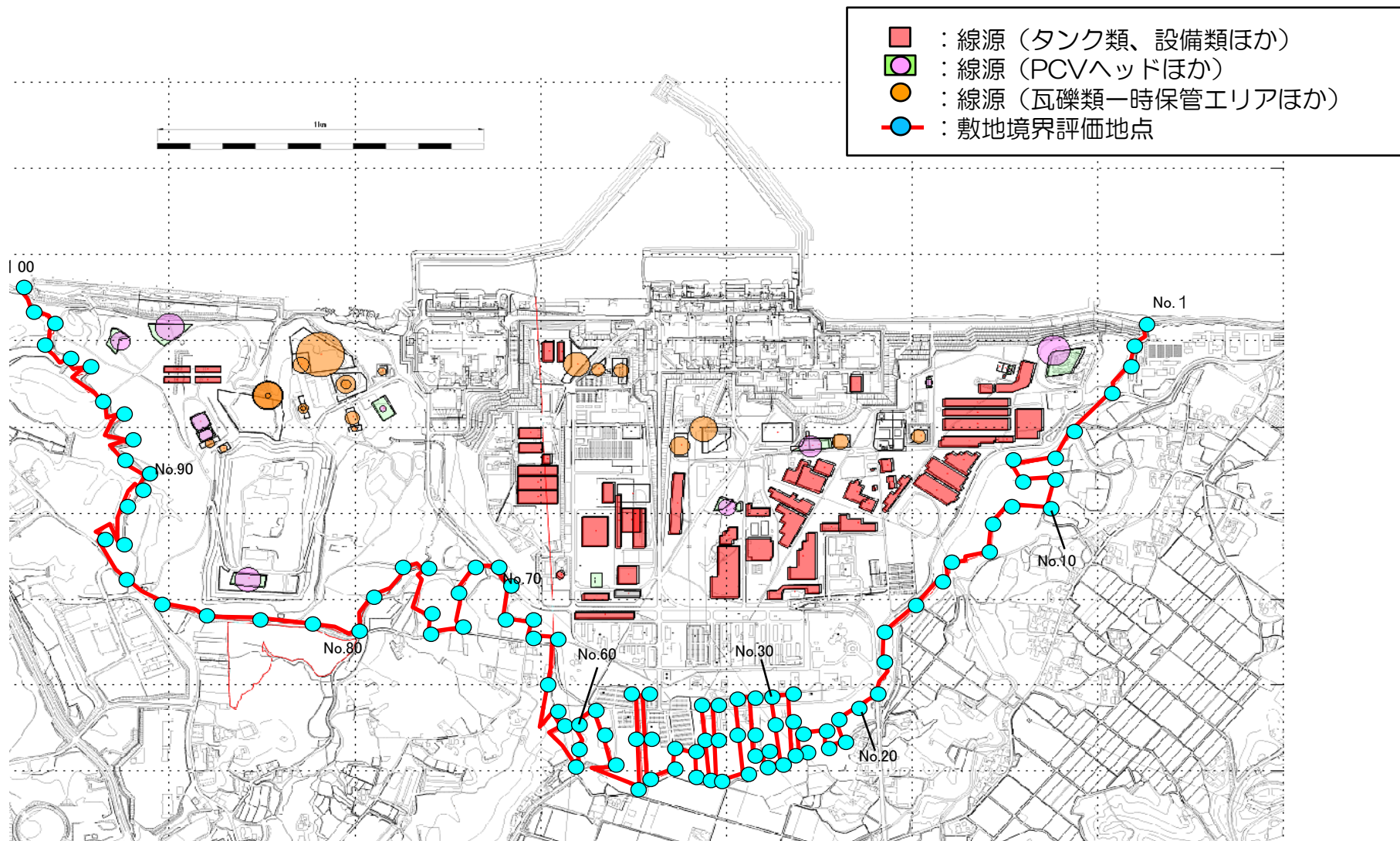
連続した風向風速データを用いて，開口部から流出する流量を算出することを検討。



気体廃棄物



【参考】敷地境界における直接線・スカイシャイン線の評価地点

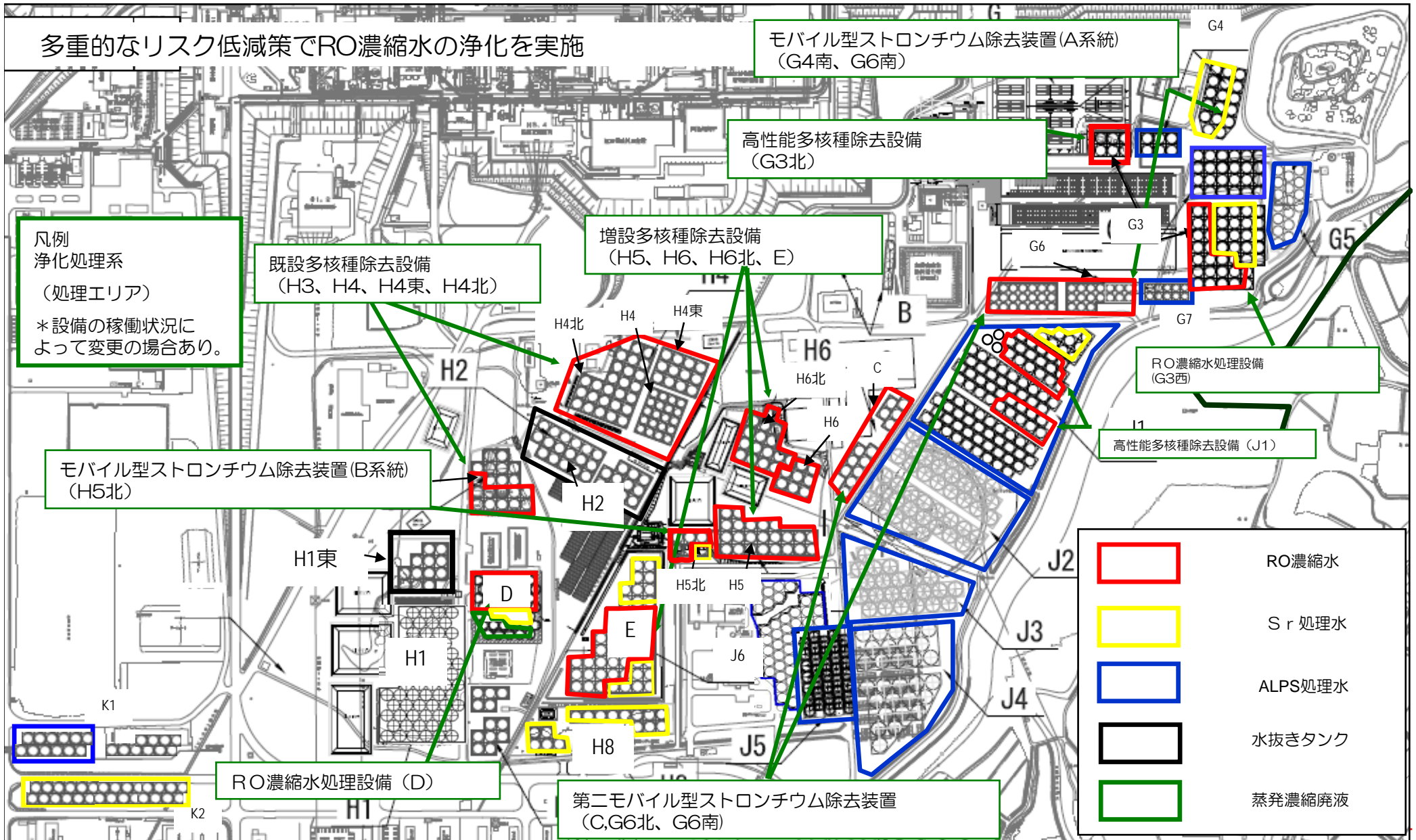


タンクに起因する実効線量低減に向けた取組状況



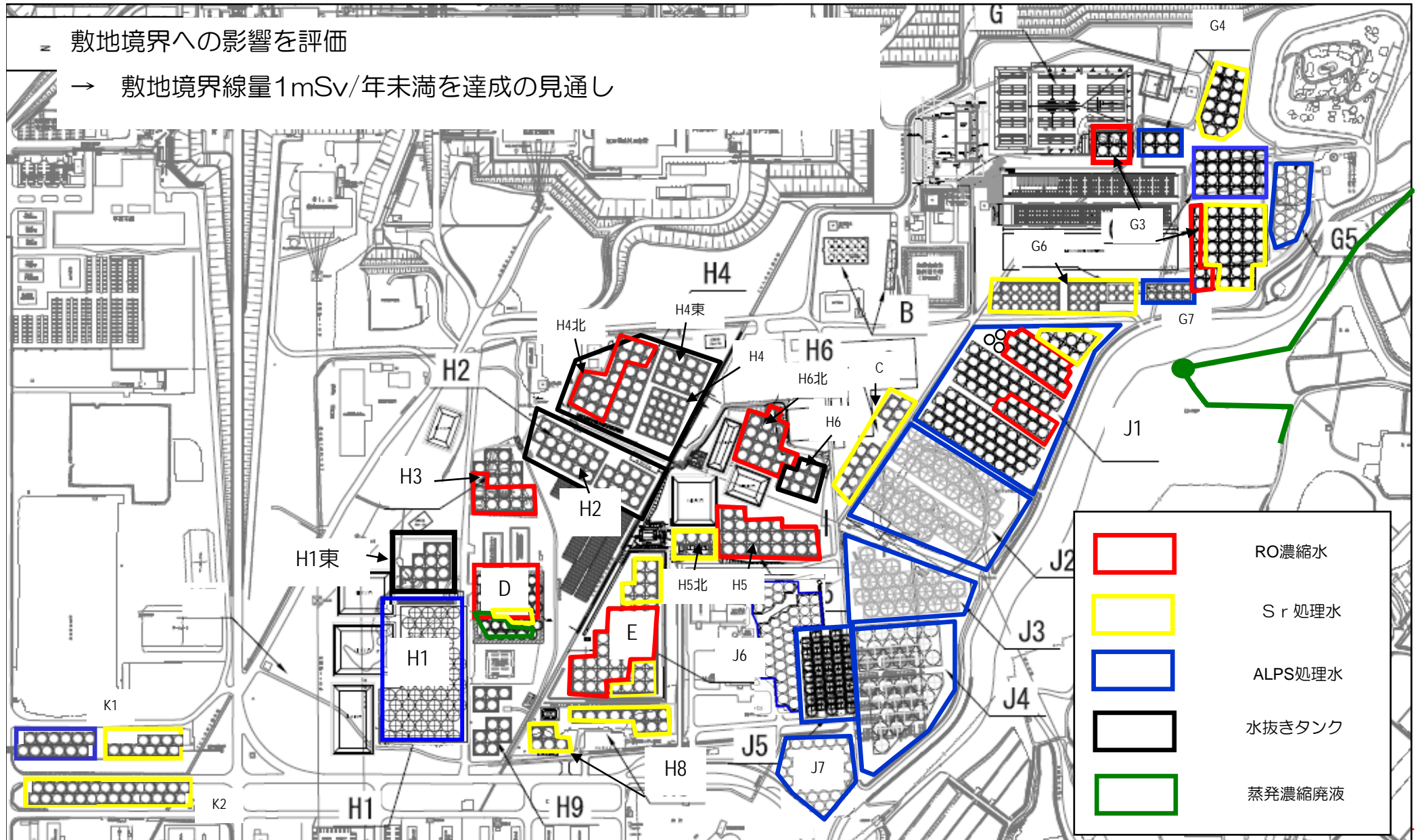
目標達成に向けた対策:RO濃縮水貯槽に起因する実効線量

① 現在のタンク内保有水の状況 (3/12現在)



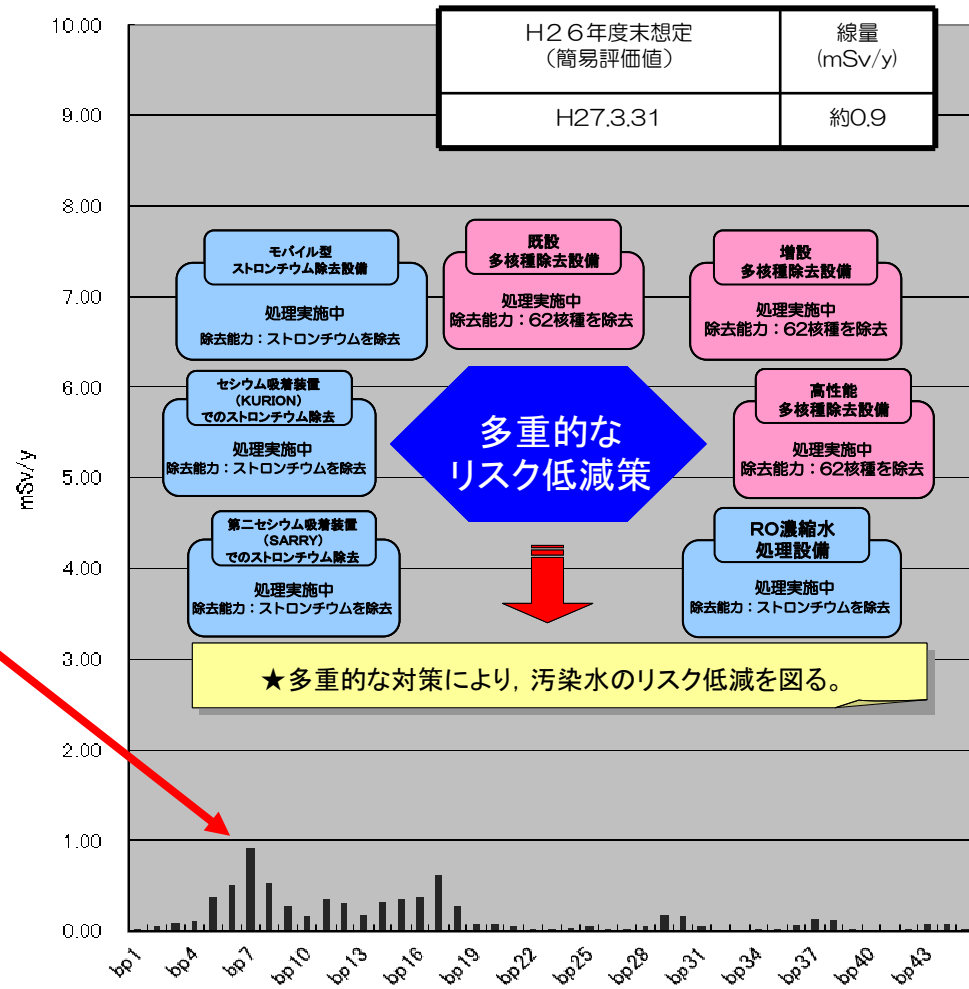
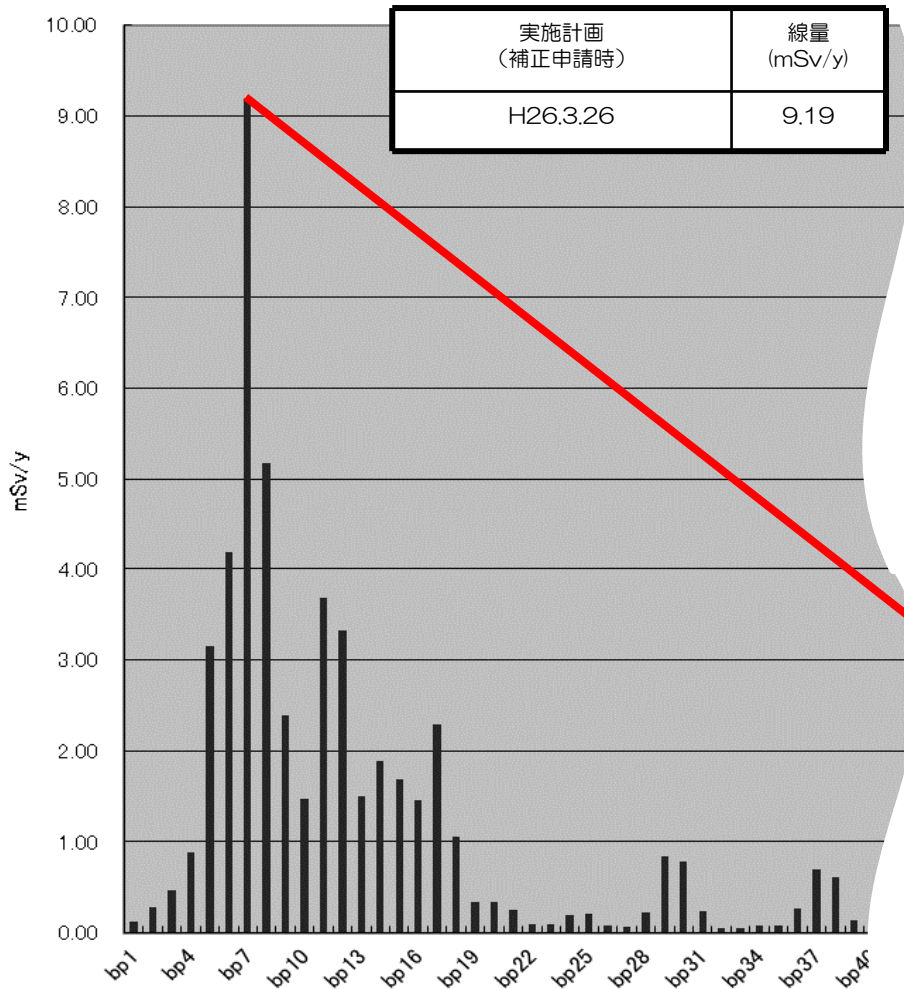
目標達成に向けた対策:RO濃縮水貯槽に起因する実効線量

② 平成26年度末時点のタンク内保有水の見通し



目標達成に向けた対策:RO濃縮水貯槽に起因する実効線量
 ③ 敷地境界の実効線量の評価結果

■ H26年度末の想定値は、約0.9mSv/年（見込み）



H27年3月末における敷地境界実効線量の見通し

ORO濃縮水貯槽以外に起因する実効線量

RO濃縮水貯槽以外に起因する実効線量は、気体廃棄物、固体廃棄物（直接線・スカイシャイン線）、構内散水、液体廃棄物等の合計で1mSv/年未満とすることを目指しており、達成する見通し。

	評価値	
	H27年3月17日認可時	H27年3月末（見込み）
気体廃棄物	0.03mSv/年	0.01mSv/年
固体廃棄物及び設備 （直接線・スカイシャイン線）	0.62mSv/年	0.54mSv/年
構内散水	0.075mSv/年	0.075mSv/年
液体廃棄物等	0.22mSv/年	0.22mSv/年
計	0.94mSv/年	0.85mSv/年

ORO濃縮水貯槽に起因する実効線量

RO濃縮水貯槽に起因する実効線量においても1mSv/年未満とすることを目指しており、達成する見通し。

	評価値	
	H27年3月17日認可時	H27年3月末（見込み）
RO濃縮水貯槽 （直接線・スカイシャイン線）	9.19mSv/年	0.9mSv/年（※）

※H27年3月末の値は簡易評価値であり、年度末の段階で詳細評価を実施予定。

（注）四捨五入した数値を記載しているため、合算値が合計と合わない場合がある。

上記より、敷地境界における実効線量の制限値（2mSv/年）を達成する見通し。